

追浜あんず通信

Oppama Anzu Press

第25号 2023年4月 発行:特定非営利活動法人 アクションおっぱま

戦争遺跡を遺し、地域から平和を考える～ 「第26回戦争遺跡保存全国シンポジウム横須賀おっぱま大会」開催

戦後70年以上が経ち、戦争経験者が少なくなる中で、戦争遺跡を遺しながら平和を考えるという「戦争遺跡保存全国シンポジウム」が毎年各地で開催されてきました。第25回記念大会が昨年8月広島市で開かれた前後に、これを主宰する「戦争遺跡保存全国ネットワーク」(本部事務局 長野市)から、2023年の第26回を横須賀市の追浜でできないかとの打診がありました。

重要な戦争遺跡のある横須賀市の中で、東京湾第三海堡遺構保存や貝山地下壕の再公開など、地域からの発意で行政と連携し保存・公開の活動を行なっているということで、白羽の矢が立ったようです。

ただ、毎回200～300人が全国から集まるという大会、NPO法人アクションおっぱまだけでは全く心もとないということで、地域のさまざまな方にご相談したところ、ぜひやるべきだとのお声が多く、開催を決断しました。地域の方々にご相談した背景には、ガイドが高齢になってきており、こうした保存・公開に関わる活動の継承に危機感があったからです。実は追浜だけでなく、各地で活動している団体でも共通の悩みとなっていました。「横須賀おっぱま大会」の開催を機に、地域の多くの方に戦争遺跡の存在を知っていただき、次世代につなげていく活動に加わっていただけたらと思っています。

大会は、9月16、17、18日(土、日、月・祝日)の3日間、追浜コミュニティセンターの各施設を会場に開催されます。1日目は全体会で、開会挨拶、記念講演、基調報告、地域報告等、2日目は3会場に分かれての分科会(テーマは「保存活動の現状と課題」「調査の方法と整備技術」「平和博物館と次世代への継承」)、写真展等、3日目は3つのコースに分かれて現地見学会になります。まだ詳細は検討中で、公表は6月になります。

大会は、「戦争遺跡保存全国ネットワーク」と「第26回戦争遺跡保存全国シンポジウム横須賀おっぱま大会」実行委員会がともに主催します。実行委員会はすでに発足しており、NPO法人アクションおっぱま、おっぱまはっけん倶楽部、貝山地下壕保存する会、追浜観光協会、追浜銀座通り商店会、追浜行政センターで構成されています。また、横須賀市と横須賀市教育委員会の後援を得ることができました。

参加は事前申込制ですので、公表の段階になりましたら会員の皆様にもお知らせします。また会の実施には多くのボランティアを必要としますので、それについてもご連絡をいたします。

大会の成功に向けて、ぜひ皆様のお力添えをお願いいたします。

(NPO法人アクションおっぱま理事長 昌子住江)

世代を超えたコラボ壁画!

2023年1月22日、関東学院大学美術部の皆さんと湘鷹みんなの部屋とのコラボ壁画のお披露目式が執り行われました。

まずは、学生さんたちと構成を練る段階で作成したドラフト画を使って、説明をさせていただきます。



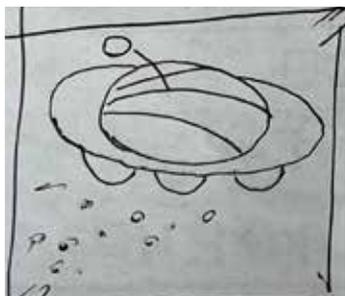
一番上にある風車は、我々の理念を表現したシンボルマークです。羽の青は若年期、赤は壮年期、白は熟年期、黒(灰色)は老年期を表し、世代を超えた交流が、地域に心地よい風を起こすという願いが込められています。

左側には鷹取山の摩崖仏や鷹そして桜並木を、右側には関東学院大学の前にある雪見橋とオリーブの校章が描かれ、コラボ感も出ています。



関東学院大学前にある雪見橋

右上にあるホームページに飛ぶQRコードとその右横に描かれているUFOを逆さにしたら「For youになる」と考えたのは、ペイントにも参加した地元の中



森俊介君が描いた下絵

学生でした。このUFOは、みんなの部屋で販売されているマドレーヌ(船越にある就労継続支

援センターつばさ第2製造)を美術部部長の森俊介君が図案化したものです。

壁画プロジェクトは、湘鷹みんなの部屋の理念を多くの人目につきやすい絶好の壁面(鷹取小学校の正門からよく見えます)に表現して一人でも多くの人に感じてもらいたいという願いから始まりました。そこから壁画が出来上がるまでの道のりは、山あり谷あり。一旦企画がスタートした後、前年度決算が赤字であることが明らかとなると、費用が掛かるこのプロジェクトに反対する意見が大勢を占めてしまいました。ところが、制作が始まると、森部長をはじめとする美術部員達の人柄が、湘鷹みんなの部屋のスタッフの心を温め、和やかな空気の中で作業は波に乗り、世代を超えた交流の好例となりました。しかし、夏休みに一気に仕上げる予定が、例年のない長雨や台風の影響で狂ってしまうと、大学の試験期間や文化祭、コロナ濃厚接触者の発生等のために完成がどんどん遅れてしまいました。その間、業者さんから借りている足場を維持するのも一苦勞でした。一番心配したのは、事故でしたが、皆さまのご協力が無事に完遂することができました。

様々な苦勞も、お披露目式の除幕の瞬間に、100人近くの参加者から感嘆の声が上がった時、報われました。湘南鷹取にお越しの際には、多くの想いが込められたこの壁画を楽しんでいただければ幸いです。鷹取小学校の正門からよく見えます。

(湘鷹みんなの部屋 執行代表 小柳茂秀)



関係者の記念写真atお披露目式

🍊 寄稿・「関東大震災と第三海堡」

読売新聞東京本社編集局写真部 次長 多田貴司

関東大震災から100年にあたる今年初め、「何か出来るきっかけになれば」と思い、追浜の第三海堡遺構の見学会を訪れました。

読売新聞で写真記者をして32年。私が第三海堡に関わったのは19年前の2004年でした。東京湾の航路確保のため撤去工事が始まってから4年経ち、引き上げられた遺構が初めて一般公開されることなり、紙面で紹介しました。当時、遺構は別の場所にあり、まだ完全には水気が抜けてなく、フジツボなどが残っていて、磯のにおいが濃厚に漂っていました。その時の一般公開は一時的なもので、恒久的な保存場所もなかったことから、遺構をどうするかは決まっていませんでした。その後、地元・追浜地域に関わる諸団体の方々の保存運動が実を結び、現在のように保存・展示され、18年には神奈川県的重要文化財に指定され、喜ばしく思っていました。

当時としては最先端技術を使い1921年に第三海堡は完成。しかし、わずか2年後に起こった関東大震災で、地盤が沈下し機能不全に陥りました。建物は無傷で80年以上経っても、その材質

の良さから、ほとんどは再生コンクリートに再利用されたと聞いています。これらの遺構は「どんな立派な建物でも、地盤がしっかりしてなければ」という地震の教訓を伝えています。100年も経つと関東大震災と直接関わる物はほとんどありません。実際に目で見て、触れる貴重な遺構を、数多くの人に知ってもらいたいと思います。



読売新聞夕刊2004年2月19日付

🍊 若布収穫祭2・11大盛會に終わる

前日までの天候不順を吹き飛ばし、雲一つ無い冬晴れの青空の下、開始時刻より前に大勢の方が来場し、今年も大収穫祭が開催されました。

昨年12月に種付けをした若布も見事に育ち一株オーナーの方も喜んで受け取っていました。会場の漁港前の広場では、漁師さんたちによる鮮魚・活魚・若布・干物・タコ飯、地元の農家さん提供の野菜、よこすか海の市民会議から無料の若布の味噌汁はじめ、鱸のあら汁・大根のおでんなどが飛ぶように完売し、成功裏に終わりました。後片付けの後の広場には、若布の干し棚には新鮮な若布が干され気持ちよさそうに、浜の風に吹かれていました。

来年もお楽しみに!

(NPO法人アクションおっぱま 副理事長 河村啓子)





お知らせ

2023年度通常総会の開催について

NPO法人の通常総会を開催する季節になりました。例年6月上旬に開催しておりましたが、今年度は少し早めに開催することとなりました。というのは、NPO法人アクションおっばまは横須賀市の指定NPO法人であり、指定NPO法人は5年更新となっています。そして今年が更新年なので、関係書類を6月中に提出しなくてはならない、ということから、2023年度の通常総

会は、5月19日(金) 13:00 ~ 15:00、会場は追浜コミュニティセンター第一学習室での開催となります。

正会員の皆様には開催通知と総会資料をお送りします。賛助会員の皆様には、総会終了後に報告をお送りします。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

訃報

- 奥村樹郎理事は、1月30日永眠なさいました(享年88)。昨年12月まで変わらず活動に参加され、1月12日に入院と知らされても、元気で戻ってくると皆信じておりました。まさにぽっかりと穴の開いたような感じがしております。ご冥福をお祈りします。
- 長らく法人の監事を務めた内野忠治さんが、4月1日永眠なさいました(享年90歳)。飄々とした感じで、子供が大好きな方でした。監事でしたが子供に関わる活動には参加して下さいました。近年ご体調を崩され監事を退任されたのが残念でした。ご冥福をお祈りします。

追浜あんず通信25号 2023年4月発行

発行 特定非営利活動法人アクションおっばま
発行人 昌子住江
編集 NPO法人アクションおっばま編集委員会

編集後記

●年明けから、大江健三郎、坂本龍一と著名人の訃報が続きました。アクションおっばまでも、長い間ともに活動してきた仲間を相次いで喪いました。活動の継承をどうして行くか、大きな宿題を抱えた1年になります。その辺りを見計らったかのように、大きなイベントが舞い込んできました。会員の皆様とともにこの山を乗り越えて、新しい景色が見れたらと思います。(昌子住江)

●マスクの装着が個人判断になっても、なかなか外せない様子です。花粉症から解放されない方も大勢で、町にはマスク顔ばかり。気持ちの良い季節には皆さんの顔がはっきり見えるようになりたいものです。(河村啓子)